少年消防クラブニュース

発行／一般財団法人 日本防火・防災協会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-9-16
（日本消防会館内）
TEL 03(3591)7121　FAX 03(3591)7130
http://www.n-bouka.or.jp
（季刊・年4回発行）
印刷／株式会社 近代消防社

少年消防クラブ指導者交流会

少年消防クラブ活性化推進会議（委員長：秋本敏文〈日本消防協会会長、日本防火・防災協会会長〉）では、去る2月8日(土)と9日(日)の2日間にわたり、主に全国88のモデル少年消防クラブの指導者を対象とした「少年消防クラブ指導者交流会」を東京都内で開催しましたので、その概要を紹介します。

今回は、特に8月に全国の少年消防クラブによる交流会が予定されていることから、大会の開催要領の説明や大会開催に向けての意見交換等が行われました。

1日目

最初に、秋本敏文委員長から「少年消防クラブの交流会が、一昨年は東日本のクラブが集まり岩手県で、去年は西日本のクラブが集まり徳島県でそれぞれ開催されました。今年は8月に全国のクラブが集まり徳島県で開催される予定です。

秋本敏文委員長

今までは、モデルクラブ中心でしたが、今回はそれ以外のクラブの多くの参加が予定されていることからモデルクラブを通じた効果が全国に広がってきたのを感じます。また、昨年12月の臨時国会で「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」が成立し、その法律の中に初めて少年消防クラブということ言葉が入り、少年消防クラブ、女性防火クラブ、その他の地域の皆さんが一緒になって地域の防災力を高めようということになりました。問題はこれからで、いろいろやろうとする中で少年消防クラブは大事なテーマであると思っています」との主催者挨拶がありました。

来賓あいさつとして総務省消防庁赤松俊彦防災課長から、防災行政の推進協力へのお礼と全国大会の開催に向けての協力を要請されました。また、「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」が制定され防災に対して世の中の関心が高まる中、消防を中心とした地域の防災を推進していくうえで少年消防クラブの協力をお願いする旨等の挨拶がありました。続いて、文部科学省学校健康教育課河村雅之課長補佐から、日ごろの子供たちへの防災活動の指導に対するお礼とその活動の積み重ねが地域の防災力の強化につながるとの話があり、文部科学省としても、緊急地震速報を活用した防災訓練とか子供たちの避難マニュアルをつくるなどの学校における防災教育の充実のための様々な施策を行っていることを紹介されました。防災については消防庁を初め関係省庁と連携しながら取り組む旨等の挨拶がありました。

赤松俊彦防災課長

河村雅之課長補佐

次に、事務局から少年消防クラブ活性化推進会議の来年度の事業として、実践的な活動を積極的に行う少年消防クラブに対する支援の継続、前記法律の趣旨に沿い住民の自主防災組織、消防団等の地域の防火防災組織と連携した少年消防クラブの活動の推進、8月の全国少年消防クラブ交流大会の開催協力等を実施する旨の説明が行われました。

続いて消防庁から昨年の少年消防クラブ交流会が徳島県で盛大に開催され、無事に終了できた旨の報告がされました。

その後、5つの少年消防クラブの活動報告がありました。

1 富丘少年消防クラブ（北海道札幌市）

発表者　小林　環 氏

クラブは昭和61年結成で、小学生が18名、中高生が18名の計36名が在籍。中学生、高校生は準指導者として、小学生を指導します。ただし、小中高の活動は違います。活動が年間36ぐらいあり、まず、地域の児童会館での救急の指導ですが、指導をやりたい小学生が行います。昨年、優良少年消防クラブを受賞し、受賞は多分に推進力となっていて、その後地域から訓練の披露依頼がありました。それから地域の中学の1学年に対して心肺蘇生の展示と指導をしています。中学校での活動は小学校からクラブ員を繋ぐ意味で重要です。それから消防学校のオープンキャンパスが年1回あり、そこで一般を対象に準指導者が心肺蘇生の指導を行い、レベル的にも消防団員に引けを取りません。地域の幼稚園でも2、30分かけて災害のシミュレーションを行っています。あとは地域の神社で、神輿のほかに、10年ぐらい大型紙芝居の読み聞かせを境内で行っています。

これらの活動は、地域の中で着実に力をつけていることを認めてもらった結果で、将来を担う人材を地域の皆さんで育てていただくのは一番だと思っています。新しい試みとして、手稲区内の5クラブの内、3クラブ合同で活動を行いました。1クラブの参加人数が少なくても、ほかのクラブと合わせたら立派な活動を組めますし、指導者も、それなりに確保できます。クラブ員が減少しても止めなくて済み、健全な運営を維持できます。

課題として、小中高のクラブ員を一緒に同じ指導者が同じ分量をかけ指導するのは、これ以上何かをする点では難しいこと。去年の将来の消防クラブのあり方のアンケートでは、年齢を下げることや年齢別により強力に活動を組むという意見が多くあったが、指導者数や年齢によっては教えづらい、あるいは参加できないということで難しい。簡単に考えないで、周辺の環境事情を整えてからやっていくといいと思いました。

次に、平成21年、ヨーロッパの青少年消防オリンピックに日本代表で、札幌、東京、徳島、長崎から5名ずつ、計20名が参加しました。23カ国、600名ぐらいが参加し、41チーム出場しました。日本でいう幼年、少年消防クラブ及び消防団合同の競技会でした。レベルは日本の消防団の訓練内容です。資機材等々が違い、救護内容も現地の方に指導を受け、練習も数時間でした。結果、順位をつけると日本1チームは37位、2チームは29位となり、ヨーロッパの国々から、日本の底力は驚異的だ、大変驚いたという声を聞きました。ちなみに1位はチェコ、2位はロシア、ドイツと続き、日本の下にイギリスとオランダ等々がいたことで、子供たちは立派にやったという感じでした。

その時の子供は「本当にあの時は貴重な時間だった、みんなの力で私たちを行かせてくれたことをひしひしと感じる。もう望んでも戻ってこない時間だ。だから思い出として大切にしたいと思う」と言っていました。また、東日本の交流会に出場した子が「素晴らしかった。みんなと一緒に食べたり、笑い合ったり、お風呂に入ったり、メールを交換したり、そういうことがとても楽しかった。これは普通に生活していてはないよね。また行きたいな」と言ったのです。ヨーロッパのときの子供たちと同じで国内外の差はあれ、日常ではなく、一歩玄関を出たときから興奮の時間で1日1日が感激なのです。子供たちに大きな夢を、希望を持たせてくれました。クラブ全員が参加できなくても、そこでもらった種を地域へ持って帰り花を育てることができる。その花を私たちが大きく増やすことができる、これは大きなことだと思います。

我々指導者は、そんな彼らの思い出づくりと感動と将来に向けての人格づくり

（2面に続く）

本紙は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。

（1面から続き）

り、それを後ろからそっと支えるような活動しかできませんが、今回の全国の交流会に向けても頑張りたいと思います。

2 三郷市少年消防クラブ（埼玉県三郷市）

発表者　五十嵐　敦氏

クラブは平成23年4月1日に設立し、子供のころから消防・防災に関する知識と技能を習得し、生命と暮らしを守ることの大切さを学ぶとともに、規律や防火マナーを身につけ、将来の地域防災を担う人材として地域に貢献できる子供たちの育成を図ることを目的としています。

昨年度は岩手県開催の少年消防クラブ交流会にも参加し、消防の技術を取り入れた合同訓練で優勝することが出来ました。この時の優勝という成果は、今の三郷市少年消防クラブの自信と誇りにつながり、そして礎になっています。

平成25年度の活動ですが4月に入・卒団式があり、総勢59名となりました。新人クラブ員は市長から少年消防クラブ手帳とクラブ員章を受け取ることでクラブ員としての自覚が生まれます。5月には訓練礼式や消防の基本動作を習得する消防基本訓練を行います。この訓練で規律を学び、消防の厳しさや楽しさを理解していきます。

また、6月にはクラブ員の代表が消防団の操法大会で軽可搬ポンプによる操法を展示しました。希望者を募り、毎週土曜日に特訓を重ね、4月の入団から、たった2カ月で操法を覚え、無事に披露することが出来ました。今回のメンバーは小学5、6年生が中心となっており、11月に東京ドームでの消防団120年・自治体消防65周年記念大会で放水訓練にも参加し、晴れ姿を披露しました。会場にはクラブ員50名とその保護者が応援に駆け付け、記念大会に参加できた喜びを全員で噛みしめました。7月には夏休みを利用して消防体験学習を3日間実施しました。暑い時期なので、休息、水分補給をこまめにとり、熱中症に特に注意しました。規律訓練や、ロープの取扱い訓練などの基本訓練やポンプ操法訓練、簡易担架搬送訓練を実施しましたが、今回は中学生が消防職員と同じ、高さ7mからロープを利用して降下や左右に展張した長さ20mのロープを自分の力で渡る渡過訓練を実施したところ男子、女子とも全員が最後までやり遂げました。小学生は規模の小さい訓練塔で中学生と同じ訓練を行いました。9月には団体生活を経験することで、協調性や交流を深めることを目的として、1泊2日で宿泊研修を実施し、オリエンテーリングや救命入門コースを受講し、AEDの取扱いも学びました。11月には火災予防運動期間中の「消防フェア」の一環として規律訓練や軽可搬ポンプ操法を披露しました。また、防火の法被を身にまとい拍子木を打ち鳴らしながら火災予防の広報を行い、市民にティッシュを配りながら「火の用心」と「住宅用火災警報器の設置」を訴えました。その他にも市の総合防災訓練や消防出初式で訓練を披露しました。3月には「そなエリア東京」へ防災体験学習に行く予定です。その帰りには途中でバスを降り、帰宅困難を想定して約8キロほど歩きながら、用意された課題をみんなで解決して、目的地まで戻る訓練を行います。

最後に今後の課題ですが、クラブ結成からもうすぐ3年が経ち、訓練のマンネリ化や中学生クラブ員に対する指導、準指導者としての育成などが今後の課題となっています。

3 土成中学校少年少女消防隊（徳島県阿波市）

発表者　鈴田　真二氏

本校では26名の生徒を選び、活動をしており、将来は地元消防団への入団や地域の消防署に就職してもらうなど、地域防災のリーダーを目指しています。昭和34年5月に発足し、当時は40名ほどが木造校舎で活動していました。現在の校長もクラブ出身で、地域に残り活動している生徒が割といます。私も土成中学校で少年少女消防隊に入っていました。今、指導者は私の先輩と2人で、地域の消防署や消防団の指導を受けながら活動を続けています。活動方針は生徒の防火・防災意識を高め、規律訓練により機敏な集団行動を可能にし、将来、地域の防火・防災のリーダー、あるいは役立つ人材に育てようということです。

主に規律訓練を中心に、屋内消火栓を使って火災想定訓練を行っています。出火場所が理科室や職員室等で、屋内消火栓を使う場所を変えながら行っています。

昭和38年には活動の功労を認められ、消防庁長官賞を受賞。また昭和46年にも少年消防隊優秀賞を受賞しています。平成3年3月に救護班を編成し、女子が入ってきたので、少年少女消防隊という名前に変わりました。平成21年には第17回ヨーロッパ青少年消防オリンピックに富丘少年消防クラブと合同で参加し、そのときの功労賞として平成22年3月に消防庁長官賞を受賞しました。

今年度、8月に西日本の19チームが徳島県に集まり、西日本大会が開かれました。交流会では本校は第2位という成績を収め、徳島県の半田中学校の消防隊が1位になりました。本校と半田中学校はバスケットボールや野球を通じて交流をしています。9月に避難訓練を行い、法被を着て、全校生徒の前で初期消火訓練を披露します。各消火班に分かれ、屋内消火栓で消火訓練を行っています。11月には地元の消防署と消防団が土成中学校で阿波市総合防災訓練を行いました。少年少女消防隊を中心に、屋内家屋倒壊救出訓練、放水訓練、はしご車による救済訓練、救護ヘリによる救出訓練などを行いました。

成果です。1、土成町消防団として、卒業生たちが活躍できています。阿波市には880名ほどの消防団員がおり、土成町の消防団員が190名ほどですが少年少女消防隊の出身者は8割を占めています。現在、地域の消防署長や阿波市消防団団長も出身者です。2、初期消火訓練により、屋内消火栓の使い方を全校生徒に知らせることができている。3、声の連携だけでなく、点呼や手信号、誘導動作の大切さを全校生徒が確認できている。訓練は消防署や消防団と一緒であることが多いので仕事がよく分かる。本年度も消防署員になってみたいという男子が何人かいます。

課題です。1、消防署や消防団との協力・連携が夏休みに限られること。26名の隊員は全員が運動部に所属し、その中のリーダーが出ています。夏休みには運動部の大会が集中し、消防署の都合がいいときに生徒がいない。生徒が都合のいいときに消防団がだめとか、全員がそろって練習できることが少ない。2、今の形で続けていくと、少年少女消防隊を経験した職員が代々指導者を受け継ぐことになるので、地域の消防署や消防団に定期的に入ってもらい、指導をしてもらうことが必要になると考えています。現在も指導してもらっていますが、生徒、消防関係、職員の研修等の予定が合う日に指導してもらっています。

4 山崎少年消防クラブ（長崎県壱岐市）

発表者　江口　正弘氏

当クラブは九州の北西部に位置する玄界灘にある長崎県の壱岐という離島にあり、人口は約2万9千人の小さな島です。豊かな自然環境に恵まれ、農業と漁業が主な産業であり、自給自足ができる島だと自負しています。その東南に位置する石田町の山崎地区という50戸ほどの集落で活動を行っています。付近には「日本の渚百選」「日本の水浴場八十八選」にも選ばれるほどの長崎県を代表する海水浴場があり、夏場は多くの観光客で賑わいます。

発足は、大正6年で、山崎地区全体を焼失した大火災がきっかけで、当時の少年たちが夜警の夜回りを始めたのが最初だと言われています。その後、昭和10年に山崎少年夜警団として結成され、昭和51年4月に山崎少年消防クラブに改名しました。郷土愛護の精神と自主防災の大切さを自覚し、自分たちの地域は自分たちで守るという強い信念を持ち、これまで続いた伝統ある夜警活動を受け継いでおり、少年たちが火災予防の重要性を認知して、防火に対する広報活動を行っています。この活動に対し、全国少年消防クラブ運営指導協議会より優良な少年消防クラブとして表彰盾を授与され、平成21年月には、ヨーロッパ青少年消防オリンピックに招かれました。短い期間での競技練習でありながらも、管轄の消防本部署員皆様の熱心なご指導により、各国に引けをとることなく競技に参加することができました。競技以外でも各国のアトラクションやさまざまな催し物が行われ、クラブ員にとって生涯の記憶に残る体験になったことは間違いありません。

現在、クラブ員の加入において厳しいものがあります。離島ということもあり、人口の流出による過疎化は免れません。島内には高校までの教育機関はあるのですが、大学進学では島を離れなくてはなりません。また島内の主産業のほかに仕事がないということ

で、高校を卒業するとともに島外へ就職する若者も多いのです。クラブ員も現在では中学生3名、小学性2名の計5名という現状です。活動状況も夜警活動を行ってはいますが、以前よりも活動する回数も少なくなってきました。その理由として、クラブ員の減少とともに、クラブ員の夜警活動時の時間の都合が合わないことが挙げられます。伝統を絶やさないためにも、今後どのようにするべきなのか。これが今の当クラブの課題です。

改善策として、現在の加入対象を少女に広げるのか、当就学外からも加入を受け入れていくほうがよいのか。それには賛同いただける協力者が必要ですし、規模拡大での活動日も考えなくてはなりません。私自身、地域の消防団員として活動しているので、今後はクラブ員と消防団員が協力して活動を継続させていけるだろうかと考えています。今は、自分たちの地域は自分たちで守るという伝統の夜警活動を続けることで、地域からの信頼をもらえるのではないかと思います。皆様と同様、地域を守りたいという気持ちは変わりませんので、この研修会でご紹介いただいた皆様の活動や実績を今後に生かせるよう、また離島ならではの活動をより強固に継続できるよう、今、当クラブにできることから継続し、活動を行っていきたいと思います。

5 伊平屋村少年消防クラブ（沖縄県伊平屋村）

発表者　名嘉　彰氏

伊平屋島は沖縄県沖縄本島の今帰仁村の運天港より41キロの地にある人口1300人の自然豊かなとても小さな島です。島の産業は農業と漁業と観光業で、特産品はもずくでつくったもずく麺、佃煮、サトウキビからの黒糖、お米、お酒などがあります。島には樹齢260年といわれる念頭平松や天の岩戸伝説が残るクマヤ洞窟など、ここでは全部を紹介できないほど名所旧跡がたくさんあります。島は1年を通してイベントや行事がたくさんあって、中でも毎年10月に月夜のもとで走る伊平屋ムーンライトマラソンがあります。フルとハーフをあわせて1200人のランナーが月明かりを頼りにゴール目指して走る姿はとても感動的です。

さて、我が伊平屋村の少年消防クラブですが、発足は平成23年4月とまだまだ歴史は浅く、当初は20名でスタートし、現在は16名です。そんな中、昨年行われた西日本少年消防クラブ交流大会に、沖縄県の代表として参加することができました。子供たちともどもたくさんのことを経験することができましたので、非常に意義のあるいい大会だったと思っています。子供たちもとても喜んでいました。

クラブ員の活動として、ゴールデンウィーク中に地元消防団と一緒にパトロールを行ったり、祭りのときは交通整理や夜間パトロール、年末年始には消火栓の点検等を実施しています。また自衛隊の協力を受けて規律訓練、ロープワークの訓練、炊き出しの訓練なども行っています。その中で集団行動の大切さを学んでいます。

そして県内で実際に活躍している消防職員及び医師、看護師等でつくっているボランティア団体の方をお呼びして、心肺蘇生、緊急時の搬送の仕方、また身近にあるものでの担架の作成などを行っています。また、ポンプ操法なども機会は少ないですが頑張って行っています。

いつかは来る災害に備えて、子供たちと一緒にいろいろなことを吸収しながら、自助、共助、公助の精神を養い、これからも頑張っていきたいと思います。

2日目

まず、少年消防クラブ活性化推進会議の専門委員でもあるリスクウォッチ代表リスクコミュニケーター長谷川祐子氏が「リスクウォッチ　―大切なものを守るために―」と題して、少年消防クラブの指導者のために、子供たちに対する指導について講演されました。講演内容については次号掲載いたします。

長谷川祐子氏

次に、事務局から8月に開催予定の少年消防クラブ交流会の全国大会の開催要領について説明があった後、大阪府河南町の河南町ファイアジュニアの森口豪士氏、広島県府中町の府中町少年少女消防クラブの神田直哉氏及び北九州市の第東中14区少年消防クラブの吉田正彦氏から昨年徳島で行われた交流会の体験発表が行われました。

森口豪士氏

河南町ファイアジュニア

神田直哉氏

府中町少年少女消防クラブ

吉田正彦氏

第東中14区少年消防クラブ

最後に、日本防火・防災協会の吉田　哲理事長から参加や報告のお礼と「指導者交流会の成果をクラブ活動の活性化に役立てるとともに、ほかの少年消防クラブなどにも情報発信をしていただきたい。全国少年消防クラブ交流大会については、皆様のご意見を踏まえよりよいものにするので積極的なご参加をお願いしたい。指導者交流会については来年以降も積極的な参加をお願いします」との閉会挨拶がありました。

吉田 哲理事長

119 指導者からの便り

六区防災ママクラブの活動を通じて

広島県　六区少年少女消防クラブ

指導員　大田　隆義

広島県北部に位置します三次（みよし）市の六区少年少女消防クラブ（以下「消防クラブ」という）は平成5年2月に結成し、20年が経過しました。消防クラブは小学校1年生から6年生までの児童で構成しています。

消防クラブの主な活動は、地域の防災訓練への参加、防火餅つき、年末の夜回り、県主催の少年消防クラブリーダー研修、地元消防署主催の交流会などです。このような活動には結成当時から、消防団員、こども会の保護者及び少年少女消防クラブ育成会員に応援していただき活動を続けてきました。

そして、数年前地域で自主防災組織を作ろうという機運が高まり、六区自主防災組織を作りました。その機会に女性消防クラブを結成したらどうかという議論になり、小学生のいるお母さんたちを主体的に加入してもらい、六区防災ママクラブ（以下「ママクラブ」という。）が結成されました。このママクラブは家庭及び地域における防災意識の普及と高揚、そして防災を通じた地域の親睦と連帯意識を高めることを目的で活動しています。

それでは、活動の一部を紹介します。

消防クラブでは毎年12月の第3日曜日に防火餅つきを行っています。これには消防団員、少年少女消防クラブ育成会員、ママクラブ員、子ども会、民生委員など多くの人が参加します。お餅は六区地域のひとり暮しの高齢者や80歳以上のお家へ配ります。

消防団員と民生委員は高齢者などの住所確認、育成会員と子ども会はお餅をつき、ママクラブ員と消防クラブ員はお餅を丸めます。昨年は50kgの餅米を4時間かけてつきあげました。

出来あがったお餅は消防団員、消防クラブ員とママクラブ員がそれぞれ5班に分かれ、120人のひとり暮しの高齢者などのお宅へ配ります。「お元気ですか、火の元を注意してくださいね」「年末・年始を元気で迎えてください」と声をかけながら、お餅を手渡しします。

みなさんからは「ありがとうね」「大切にいただきます」と感謝の言葉をいただき、消防クラブ員は活動の励みになっています。

また、毎年年末26日から3日間、地域で火災のない新年が迎えられるように願いを込めて、六区地域の夜回りを行っています。

この時にも、消防団員、消防クラブ育成会員、ママクラブ員、子ども会、民生委員が参加しています。

夕方6時に集合し、消防クラブ員を3～4班に分け

（4面へ続く）

（3面から続き）

て、各班に消防団員、ママクラブ員などが入り、地域を40分程度かけて夜警して回ります。

消防クラブ員は雨・雪等の悪天候の中「戸閉まり用心・火の用心」と大きな声を出し、拍子木を打ち、火災のない新年が迎えられるように願いを込めて頑張っています。拍子木の音を聞いて、家から出て「寒いのにご苦労さん」「ありがとう」と言葉をかける人もあり、また一段と大きな声で防火を呼びかけて頑張っています。

これまで消防クラブは地域を愛すること、地域に愛されるクラブを目指し活動してきました。ママクラブが結成されてからはママクラブ員の児童が活動に参加してくれて、活動には20～30人の消防クラブ員が参加をしてくれます。そして、ママクラブ員との横の連携ができて活動に幅ができました。地域からもより支援をいただくようになり、活動が活性化されたように感じています。

これからも消防団、ママクラブとともに、地域の人たちが安全で安心して暮らせる地域づくりのために活動を続けたいと思います。

夜回りの様子

六区防災ママクラブ

六区少年少女クラブ

少年消防クラブの活動

瀬戸市立南山中学校少年消防クラブ

クラブ員が職場体験

愛知県

瀬戸市消防本部

1月22日・23日の両日、瀬戸市立南山中学校少年消防クラブの5名は、瀬戸市消防署において職場体験を実施しました。市内全8校の中学校と21校の小学校で構成される瀬戸市少年消防クラブ連絡協議会（会長水野義久）では、年間を通じて様々な行事へ参加をしていますが、消防署での職場体験も人気の行事の1つです。クラブ員5名は、少年消防クラブ専用の「活動服」に着替え、初日から救急や救助出動が相次ぐ中、休む間もなく迅速に出動していく署員たちを見送りながら、忙しい消防署の1日を実感しました。消防指令センターの見学から始まり、車両整備、ロープ登はん、AEDを使った応急手当、消防車からの放水、一番人気の梯子車搭乗など、様々な訓練を通して消防署の仕事を体験しました。2日間の体験を終えたクラブ員は「人を助ける仕事に憧れて消防署での職場体験を選びましたが、放水体験でのホースの水圧や、梯子車の高さに驚きました」、「出動がたくさんあって、忙しそうで大変びっくりしましたが、将来絶対消防士になりたい」と感想を語りました。瀬戸市少年消防クラブ連絡協議会では、今後もこのような職場体験や各種行事を通じて、クラブ員の育成や防火意識の向上に努めていきます。